

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Mermaid Construction and Grammaticalization of Nouns

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 角田, 太作, TSUNODA, Tasaku メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000689

〈共同研究プロジェクト紹介〉
形容詞節と体言締め文：名詞の文法化

人魚構文と名詞の文法化

Mermaid Construction and Grammaticalization of Nouns

角田 太作 (TSUNODA Tasaku)

国立国語研究所 言語対照研究系 教授

(Professor, Department of Crosslinguistic Studies, NINJAL)

《要旨》 日本語には、前半が動詞述語文などと同じであり、後半が名詞述語文と同じである文がある。まるで人魚のような文であるので、これらの文を人魚構文と名付けた。名詞の中には、人魚構文で使う場合に文法的な意味・働きを持つもの、即ち、文法化しているものがある。人魚構文は世界的に見ても珍しいようだ。日本語以外には、アジアの七つの言語とアフリカの一つの言語にしか見つかっていない。

Abstract: Japanese has a construction whose first part has the structure of a sentence with a verbal (or similar) predicate, but whose second part has the structure of a sentence with a nominal predicate. In view of its dual characteristics, I have labeled it the 'mermaid construction'. Some of the nouns used in this construction have a grammatical meaning or function, that is, they are grammaticalized. The mermaid construction seems uncommon crosslinguistically, being found only in Japanese and seven other languages in Asia and one language in Africa.

1. はじめに

私は、角田 (1996) で、日本語のある種の文を考察して、「体言締め文」(noun-concluding construction) と呼んだ。現在では「人魚構文」(mermaid construction) と呼んでいる。このように名付けた理由は第2節で述べる

人魚構文の原型は (1) に示す構造を持っている。即ち、始めに節があり、名詞が続いて、いわゆるコピュラ「だ」で終わる。例文を (2) から (4) に挙げる。

- (1) 人魚構文の原型
[節] 名詞 だ。
- (2) [花子は名古屋に行く] 予定 だ。
- (3) [花子は今本を読んでいる] ところ だ。
- (4) [外では雨が降っている] 模様 だ。

角田 (2011) は、その後の研究成果も繰り込んで、日本語の人魚構文を、音声、形態、意味、統語、通時的变化、文法化の観点から、かなり詳しく考察した。本稿では、主に以下の二つの観点から述べる。(i) 意味と (ii) 意味・働きの面での文法化。

2. 人魚構文の特異性

人魚構文は日本語では頻繁に使う。しかし、よく考えて見ると、奇妙な構文である。統語の面でも、意味の面でも、奇妙である。更に、世界的に見ても珍しいようだ。

[1] 統語の面

人魚構文は（少なくとも、その原型においては）、[節]の部分だけで、文として使える。(2)-(4)を、(5)-(7)と比較されたい。

- (5) 花子は名古屋に行く。
- (6) 花子は今本を読んでいる。
- (7) 外では雨が降っている。

(5)-(7)は、動詞述語文である。一方、人魚構文(2)-(4)は、「名詞」+「だ」で終わる。この点では、人魚構文は名詞述語文に似ている。名詞述語文とは、(8)のような文である。

- (8) 花子は学生だ。

即ち、(2)-(4)の類の文は、いわば、前半は動詞述語文であり、後半は名詞述語文である。実に奇妙な構造を持っている。

これらの文を「体言締め文」と呼んだのは、動詞述語文の形で始まるが、文末は名詞（即ち、体言）で締めるからである。また、これらの文は、前半は動詞述語文であるが、後半は名詞述語文である点で、人魚に似ている。人魚は、上半身は人間であるが、下半身は魚である。このため、これらの文を「人魚構文」とも呼んだ。

[2] 意味の面

意味の面でも、(2)-(4)のような文は、文字通りの意味を考えると、実に奇妙な文である。例えば、(2)について言うと、花子は予定ではない。人間である。(3)について言うと、花子はところではない。人間である。(4)について言うと、雨は模様ではない。自然現象である。

このように、人魚構文は、統語の面でも、意味の面でも奇妙な文である。

[3] 地理的分布

更に、世界的に見ても、人魚構文は珍しいようである。人魚構文の存在について、本共同研究プロジェクトのメンバーが研究している約40近くの言語、および、それらの言語の周辺の言語で、共同研究プロジェクトのメンバーがよく知っている言語について調べた。更に、プロジェクトリーダーが、海外の言語学者も含めて、数多くの言語学者に問い合わせた。これらの言語の総数は100を超えるであろう。これらの言語の中で、(1)に挙げた、人魚構文の原型またはそれに近いものを持っているのは、日本語の他には、タガログ語、琉球語、ア

イヌ語、韓国語・朝鮮語、中国語、アムド・チベット語、ビルマ語、シダマー語（エチオピア）の、わずか八つの言語である。これらの言語の大部分はアジアの言語である。アジア以外では、アフリカのシダマー語（エチオピア）に見つかっているだけである。

人魚構文の原型でもなく、またそれに近くもないが、やや人魚構文に似ているものが、ユカギル語（シベリア）、サハ語（シベリア）、モンゴル語、ダバ語（中国）、ネワール語（ネパール）、ヒンディー語（インド）、クルフ語（インド）の七つの言語に見つかった。これらの言語も全てアジアの言語である。

人魚構文は、アジアとアフリカの他の言語には見つかっていない。北米、中米、大洋州、欧州でも見つかっていない。私が調査したオーストラリア原住民語にも見つかっていない。従って、人魚構文は世界的に見ても、珍しいようである。

3. [節] のタイプ

(1) で示した人魚構文の原型で、[節] に現れる節には、以下の種類がある。

(a) 動詞述語節：例は (2)–(4)。

(b) 名詞述語節：例は (9)。

(c) 形容詞述語節：例は (10)。

(d) 形容動詞述語節：例は (11)。

形容動詞の場合には、[節] の述語は連体形である。終止形は使えない。(12) を参照されたい。(言えない文は星印 (*) で示す。)

(9) [明夫は天才である] つもりだ。

(10) [明夫は明るい] 表情だ。

(11) [明夫は元気な] 表情だ。

(12) *[明夫は元気だ] 表情だ。

4. 「名詞」のタイプ

「名詞」の位置に現れるものは、以下のように分類できる。

(a) 実質名詞、即ち、文法化していない名詞。

(b) 形式名詞、即ち、文法化した名詞。

(c) 後接語「の」。

実質名詞と形式名詞の区別は難しいが、大まかに言って、以下のように分類できるであろう。

4.1 実質名詞

「名詞」の位置に現れる実質名詞を、仮に以下のように分類する。

[1] 「意志」の類

この類に属す名詞は「予定、計画、方針、魂胆、企み、意向、所存、狙い、構え、姿勢、

気, 気持ち, 考え, 決心, 決意, 覚悟, 戦術, 戦略」などである。

(13) 「政府は米の輸入を認める」意向だ。

[2] 「段取り, 見込み」の類

この類に属す名詞は「段取り, 運び, 見通し, 見込み, 予想, 方向, 流れ, 勢い」などである。

(14) 「政府は米の輸入を認める」見込みだ。

[3] 「感情」の類

この類に属す名詞は「感じ, 気, 気持ち, 気分, 思い, 心境」などである。

(15) 「私はやっと目標を達成した」感じです。

[4] 「状況, 結果」の類

この類に属す名詞は「模様, 様子, 気配, 状態, 状況, 情勢, 事態, 有様, 形, 格好, 始末」などである。

(16) 「工場で大きな爆発が続いている」様子だ。

[5] 「印象, 雰囲気」の類

この類に属す名詞は「印象, 感じ, 感触, 趣, 雰囲気, ムード」などである。

(17) 「この町は別世界にある」印象です。

[6] 「習慣」の類

この類に属す名詞は「傾向, 風潮, 習わし, 風習, 習慣, 癖, 生活」などである。

(18) 「日本人は正月を祝う」習わしです。

[7] 「人間の性格」の類

この類に属す名詞は「性格, 性質, 性分, 気質, たち, タイプ」などである。

(19) 「太郎はいつもみんなを助ける」性格だ。

[8] 「役目」の類

この類に属す名詞は「役目, 役割, 責任, 決まり, 掟, 立場, 資格, 運命, 宿命, 定め, 身の上」などである。

(20) 「学生は毎週レポートを提出する」決まりだ。

[9] 「体の特徴」の類

この類に属す名詞は「体, 体つき, 体格, 体質, 表情, 口ぶり, 姿勢」などである。

(21) [あの力士は立派な] 体格だ。

[10] 「無生物の構成」の類

この類に属す名詞は「作り, 構造, 内容, 仕組み, 設計, システム, スタイル」などである。この類は, [9] 「体の特徴」の類に似ている。

(22) [この車は時速 300 キロで走る] 構造だ。

[11] 「時間の関係」の類

この類に属す名詞は「時間, 前, 後, 直前, 直後, 途中, 最中」などである。

(23) [太郎は丁度出かける] 前だった。

[12] 「疑い」

この類に属す名詞は「疑い」だけである。

(24) 県警は前知事を逮捕した。[調べでは建設業界から一千万円をもらった] 疑い。

この例文が示すように, 「疑い」を使った場合, 「だ」は普通, 言わない。

4.2 形式名詞

「名詞」の位置に現れる形式名詞の大部分は分類が困難である。個々に列挙する。ただし, 「方」と「向き」は意味が似ているので, 一つのグループにまとめる。[6] に挙げる。

[1] 「つもり」

意志を表す場合 (例は (25)) と評価を表す場合 (例は (26)) がある。

(25) 意志: [太郎は明日東京へ行く] つもりだ。

(26) 評価: [花子是一所懸命努力した] つもりだ。

[2] 「はず」

予定, 予期を表す場合 (例は (27)) と悟りを表す場合 (例は (28)) がある。

(27) 予定: [太郎は明日東京へ行く] はずだ。

(28) 悟り: (試験があるのか。) [どうりで花子是一所懸命勉強している] はずだ。

[3] 「わけ」

主に理由を表す。

(29) 花子是一所懸命勉強している。[合格したい] わけだ。

[4] 「もの」

様々な意味・働きを持つ。例えば, (i) 義務, 助言 (例は (30)), (ii) 説明 (例は (31)), (iii)

過去の追想, 過去の習慣 (例は (32)), (iv) 驚き, 強い感情 (例は (33)), (v) 文体的な効果・働き (やや形式張った文体) (例は (34)) などである。

- (30) [男の子は泣かない] ものだ。
- (31) 政府は米の輸入を禁止した。[農民の要求に応えた] もの。
- (32) [太郎はよく東京へ行った] ものだ。
- (33) [うまい酒を飲みたい] ものだ。
- (34) [ここに我々は政府の決定に抗議する] ものである。

[5] 「次第」

文体的な効果・働きを持つ。やや形式張った文体になる。

- (35) [我々は心からお詫びする] 次第です。

[6] 「方」と「向き」

習慣, 傾向などを表す。

- (36) [花子はよく勉強する] 方だ。

[7] 「一方」

「ますます」の意味を表す。

- (37) [雨が強くなる] 一方だ。

[8] 「ところ」

進行 (例は (3)), 完了 (例は (38)), 開始などを表す場合が多い。やや形式張った文体となる場合もある。文体的な効果・働きである。

- (38) [太郎は今出かけた] ところだ。

[9] 「こと」

助言, 指示, 義務を表す。

- (39) [学生は一所懸命勉強する] ことだ。

[10] 「由」

伝聞を表す。

- (40) [花子が合格した] 由。

人魚構文で, 名詞の位置に「由」を用いた場合には, 「だ」は使わない。

4.3 後接語「の」

「の」を格助詞と見なす考えもあり，形式名詞と見なす考えもあり，nominalizer と見なす考えもあり，意見が分かれる。しかし，「の」を，word（自立語）でもなく，suffix（接尾辞）でもなく，enclitic（後接語）と見なすことには問題無いであろう。「の」の例文を挙げる。

(41) 学生が一所懸命勉強している。[試験がある] のだ。

5. 意味・働きの側面と文法化

(1) で示した人魚構文の原型の「名詞」の位置に現れる語について，4.1 で実質名詞を，4.2 で形式名詞を，4.3 で後接語「の」を検討した。

実質名詞の場合には，名詞自身の意味と，その名詞が現れる人魚構文の意味の間には大きな隔たりは無い。例えば，例文 (42)（例文 (2) と同じ）の「名詞」の位置に「予定」が現れている。人魚構文 (42) が表す意味は，名詞「予定」の意味から予測する文の意味と同じであると言える。

(42) 花子は名古屋に行く 予定 だ。

形式名詞について，人魚構文の外で使った場合の意味とその名詞が現れる人魚構文が持つ意味・働きを比較して，表 1 に示す。

表 1 形式名詞の意味と人魚構文の意味・働き

	名詞の意味	人魚構文の意味・働き
つもり	意図	(a) 意志 (b) 評価
はず	予定, 予期	(a) 予定, 予期 (b) 悟り
わけ	原因, 理由	理由
もの	物	(a) 義務, 助言 (b) 説明 (c) 過去の追想・習慣 (d) 驚き, 強い感情 (e) 文体的な効果・働き
次第	過程, 経緯	文体的な効果・働き
方, 向き	方向	習慣, 傾向
一方	一方向	「ますます」
ところ	場所	(a) 進行, 完了, 開始など (b) 文体的な効果・働き
こと	事	助言, 指示, 義務
由	手がかり	伝聞

形式名詞の場合，実質名詞の場合とは異なり，名詞自身の意味とその名詞が現れる人魚構文が持つ意味・働きの間には大きな隔たりがある。ほとんどの場合，人魚構文が持つ意味・

働きは、名詞の意味から予測することは困難である。

中には、語源がもはや（少なくとも私には、語源辞典を調べない限り）分からない場合もある。例は「はず」である。人魚構文では、(i) 予定, 予期 (例は (27)) と (ii) 悟り (例は (28)) を表す。ところが、語源は、『日本国語大辞典』(小学館, 2009, 第2版, 第10巻: 1123)によると、「矢の上端で、弓の弦をかける部分。矢筈」である。同大辞典によると、下記の意味変化をたどった。

矢筈「(と弦とはよく合うところから) 物事が当然そうなること。道理。理屈。筋道。転じて、予定・てはず・約束などの意にもいう。」

形式名詞が現れる人魚構文が持つ意味・働きは、大まかに言って、以下の三つのように分類できる。

- (a) モーダルな意味：意志, 評価, 予定, 悟り, 理由, 義務, 助言, 説明など
- (b) アスペクト的な意味：習慣, 傾向, 進行, 完了, 開始など
- (c) 文体的な効果・働き

形式名詞が現れる人魚構文が持つ意味・働きの大部分は、モーダルな意味である。

このように、形式名詞は、人魚構文に現れる場合には、元々の意味は持たないで、文法的な意味（モーダルな意味, アスペクト的な意味）または文体的な効果・働きを持っている。

ある語が、元々の意味を失って、文法的な働きをするようになる現象を文法化と呼ぶ。人魚構文に現れる形式名詞は全て文法化していると言える。

6. まとめ

人魚構文は日本語では頻繁に使う。しかし、よく考えて見ると奇妙な文である。前半が動詞述語文などと同じであり、後半が名詞述語文と同じである。まるで、人魚のようだ。

人魚構文の「名詞」の位置に現れる名詞の中で、形式名詞の場合には、名詞の元々の意味と人魚構文が持つ意味・働きの違いが著しい。人魚構文の中では文法化している。この場合、人魚構文が持つ意味・働きは、(a) モーダルな意味, (b) アスペクト的な意味, (c) 文体的な効果・働きの三つに分類できる。

人魚構文は世界的に見ても珍しいようだ。その原型あるいは原型に近いものは、日本語の他には、アジアの七つの言語とアフリカの一つの言語にしか見つかっていない。

これらの言語においても、人魚構文に現れる名詞は文法化の現象を示している。

今後、様々な言語における人魚構文の特性を精査・比較することにより、文法化の研究などの点において、言語学の一般理論に貢献できるであろう。

参考文献

- 角田太作 (1996) 「体言締め文」 鈴木泰・角田太作 (編) 『日本語文法の諸問題：高橋太郎先生古希記念論文集』 39-161. 東京：ひつじ書房.
- 角田太作 (2011) 「人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献」 『国立国語研究所論集』 1: 53-75.

角田 太作 (つのだ・たさく)

国立国語研究所言語対照研究系教授。Ph.D. (言語学) (Monash 大学)。Griffith 大学講師, 名古屋大学助教授, 筑波大学教授, 東京大学大学院教授を経て, 2009 年 10 月より現職。James Cook 大学特任教授。主な著書・論文: *The Djaru language of Kimberley, Western Australia* (Pacific Linguistics, Australian National University, 1981), Split case-marking patterns in verb-types and tense/aspect/mood (*Linguistics* 19, 1981), 『世界の言語と日本語』 (くろしお出版, 1991 (改訂版 2009)), *Language endangerment and language revitalization* (Mouton de Gruyter, 2005 (Paperback 2006)), *A grammar of Warrongo* (De Gruyter Mouton, 2011).

社会活動: *Linguistics* (Mouton de Gruyter) 査読委員, *Studies in Language* (John Benjamins) 査読委員, Pacific Linguistics 編集顧問委員, Association for Linguistic Typology 入選委員会委員長, Linguapax 顧問委員, 日本言語学会評議員, Warrongo 語 (豪州東北部) の復活運動に協力。

基幹型共同研究プロジェクト「形容詞節と体言締め文：名詞の文法化」

プロジェクトリーダー 角田太作 (国立国語研究所 言語対照研究系 教授)

プロジェクトの概要

日本語には、前半が動詞述語文などと同じであり、後半が名詞述語文 (「名詞+だ」と同じである、実に奇妙な文がある。前半と後半が異なる点で人魚に似ているので、人魚構文と名付けた。

人魚構文の「名詞」の位置に現れる名詞の中で、形式名詞は文法化している。人魚構文が持つ意味・働きは、(a) モーダルな意味、(b) アスペクト的な意味、(c) 文体的な効果・働きの三つに分類できる。

人魚構文は世界的に見ても珍しいようだ。その原型あるいは原型に近いものは、日本語の他には、アジアの七つの言語とアフリカの一つの言語にしか見つかっていない。

これらの言語においても、人魚構文に現れる名詞は文法化の現象を示している。

今後、様々な言語における人魚構文の特性を精査・比較することにより、文法化の研究などの点において、言語学の一般理論に貢献できるであろう。